

特 71

805

根なし草

蓬萊舎主人稿



301388-001-2

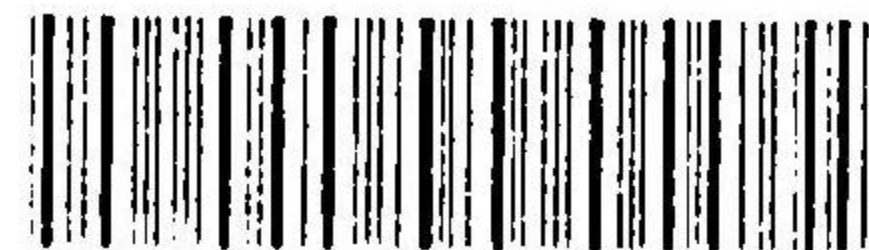
特71-805

根なし草

西谷忠雄

M39.9

EAG-0001



卷 71

805

根なし草

蓬萊舎主人稿



特ク
AR

自序

不肖、乏を相樂郡立農林學校長に享けしより茲に四
 星、公務上、私交上、郡内幾多の士と交り、その知遇を
 悉く入す、随つて其間、逸話亦渺からず、今心に浮びつる
 一篇を成す、依つて根なし艸と
 在り、昔々、風俗の
 にも、宜しき事、
 明治三十九年八月下流

木津町燈籠寺今井辰郎にて
 菅野 西谷 忠

雄明 治
 39 9 7
 肉交

かねのなる木は何から背つ

つとめはげめの芽から出る

囀はくるく車のように

しんぼする身に廻りくる

かねのなる木でつくつたわらぢ

ふめば小判のあどがつく

道歌

天地のめぐみつみをく無盡蔵

鐵で掘りだせ鐵で刈りどれ

世の中は何のへちまをさもへんも

ふらりとしては惹らされもせず

苦にするなかねは世上にあつげたく

はしくばやらふ働ひてどれ

吉野川そのみなかみをたづぬれば

むぐらのしづく萩の下露

人多き人の中にも人少なき

人になれ人人になせん

なまはばばらまははばばるふらななるものごと

なちぬはかのがなさぬなりけり

氣に入らぬ風もあらふに柳かな

ぶふりしては陰へすへちまも足袋の底

百なりや遊すぢの心より

我袖をぬらすか漣理のもやひ傘

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

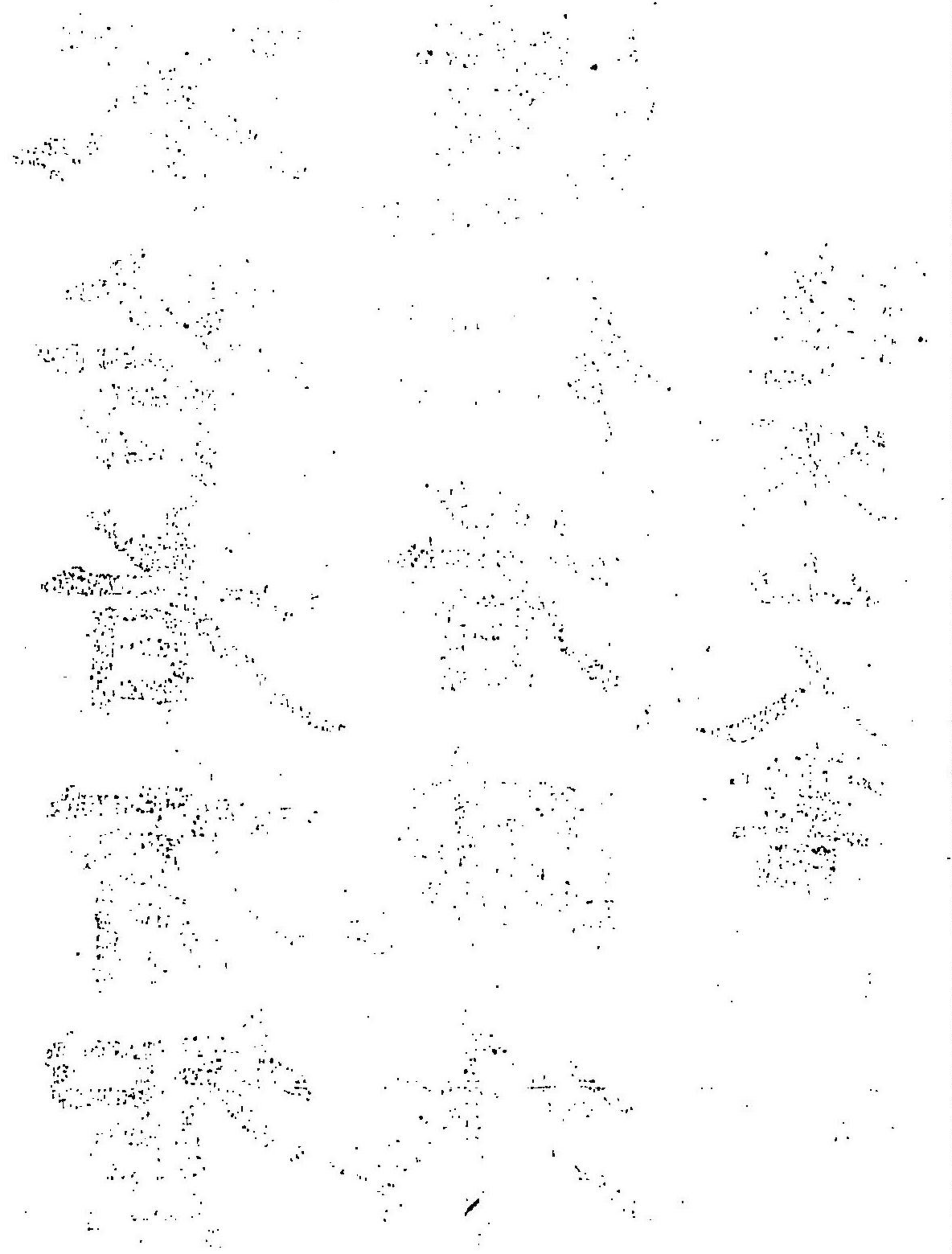
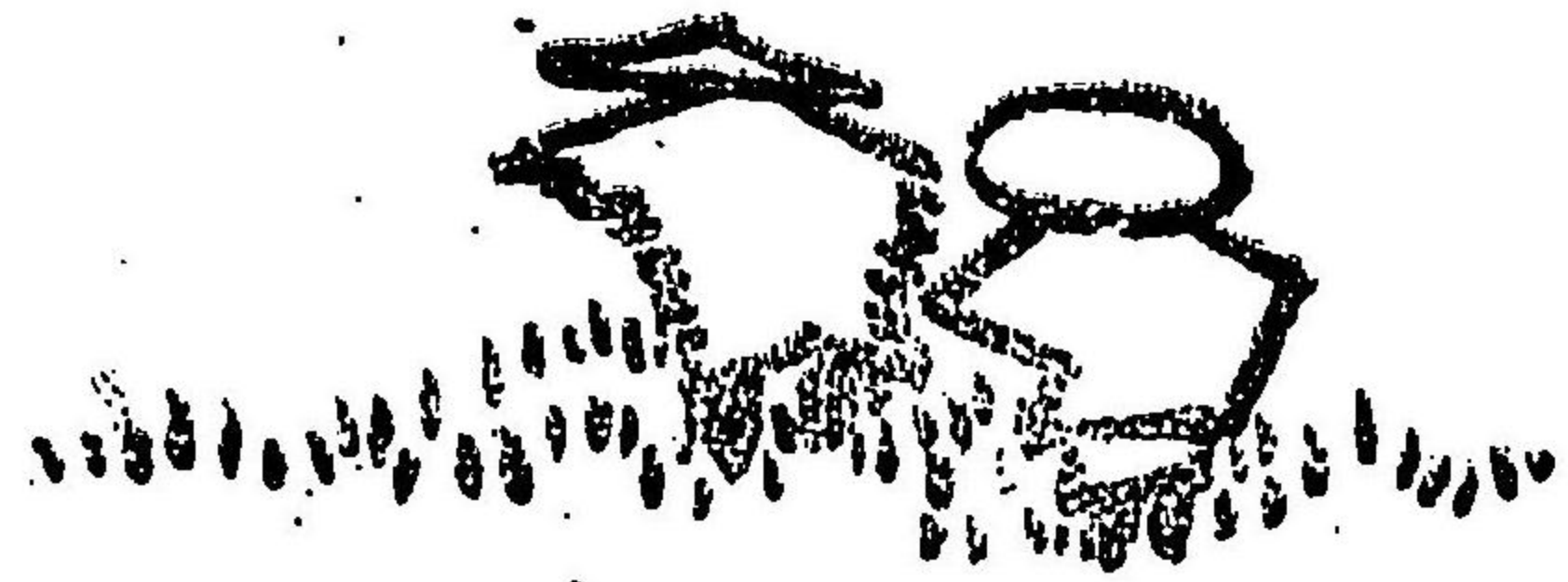
愛さ事に慣れて雪間のよめなかな

不苦者有智
遠仁者踈外

逢來山人書



世に
あはれ
ふ
あはれ
あはれ
あはれ



特71
805

根なし草

◎君の月給が高すぎる

蓬洲 西谷忠雄稿

養正教師松岡純雄氏、養正別科講習生募集として常尾村に出張し、
郡會議員吉岡多十郎氏を訪ふ。先づ一ト通りの挨拶了るや、吉岡氏
すかさずして曰く「オ、君が養正教師の松岡か、君の月給が高すぎ
るといつて、郡會でやかましくかつたぞ」と。松岡氏いきなり荒膽を
奪はれ、悄々として逃げ歸る、色を變へて余に訴ふ、其後余巡回の
序吉岡氏に會し、「君はどうもあゝいふことをいつてくれば職員
の統一に困まる、本人も働さがひがない、もふあゝゆふことはいはぬ

よふにしてくれ玉へ」と。吉岡氏曰く「イヤあゝいつておけば本人も一層はげむだろうふ、又勵げまなくてはだめよ」と、余曰く「人を用ふるに道あり、君はごふも馬車馬の方で僕は不賛成だ、僕の學校の職員は皆正札附の懸直ふした、少々高くても價値は充分ある、今後の働きぶりを見てくれたまへ」と、それより該農事改良のことに及び、か得手の柿の話に移りて、縷々有益なる經驗談を聽いて歸りぬ、松岡氏も亦意解けて益々其職務に奮勵せり。

◎岡田先生の紛失

岡田助教諭、身體矮小五尺に満たず、生徒と共に作業に従事し、その生徒の群に入るや、往々其所在を失ふことあり、知人來りて面會を同氏に求む、同氏に作業場にありて生徒と共に手拭を蒙りて粗磨りに従事す、人何れが岡田氏なるを辨せず、生徒聲を揃へて曰く「岡田先生は僕だ、イヤこゝにはをらぬ」と、人遂に要領を得ずして去

る、中岡書記追及し、伴ひ來りて面會を同氏に求め、用を了へて歸らしむ、中岡氏諧謔一番、岡田先生の紛失騒動と稱す、是より一時校内の大評判となれりき。

◎鼎の輕重如何か

明治卅六七年は本校の厄年なりき、本校は創立以來誠に郡の厄介物としていつももてあまされき。然れども折角建てたるものは無暗につぶすべからず、依て府立の經濟に移さんとし、運動の結果美事否決せらる、是に於て其尻本校に廻り來りて、農林學校の功果如何の問題となり、有力なる某々議員學校の實際を調査することとなりぬ、曰く郡長の説明那術の統計にては、到底真相を知るに由なくこれに満足する能はずと茲に本校訪問の趣旨を語りき、余は此御親切なる御訪問に接し、心にヤア來たな鼎の輕重如何か………むらゐることになつて來たと思ひけるが、余は此珍客に向つて明言せり、創立

二年や三年で効果問題を持ち出すのは餘り早すぎる、不完全な設備で不完全な教育をした、第一回卒業生が出るや否や、それをひつかまゑて彼是いふのは餘り酷である、ナルホド目下生徒は少いが、これは種々なる原因から來たことで、今一口にこゝで説明することは出來ない、自分には改善策について大に意見があるから、追て詳細認めて提出することゝすべしとて、日を刻して別れ、其後蒲團を蒙りて三日三夜考へ、筆を採つて徹夜一目も寝ずして書きつゝり、恰も鶏鳴に及びて一片の意見書出來上り、自分は極無遠慮に赤心を吐露して、慷慨悲憤の筆を揮ひ、思ひ切つたることを書きけるが、幸に多數の同情を得て、今日の盛運に向ふことを得たるは幸甚。

◎紀念直語集

後藤郡長、實習地の管理につき非常に注意を拂はれ、時々半切に簡單なる注意を記して學校に送り越さず、恰も帝國議會の質問書の

如し、吾人これを直語と稱す、曰く蔬菜園に雜草の生ずるを見る、之を抜かざるは如何、曰く果樹園に害虫發生の微あり之を取らざるは如何苗代仕舞は一般に勵行せしめつゝあるに、其校に限り之を爲さざるは如何と、高見實習主任常に曰く、ドウモ郡長の氣の早いのは閉口だ、實習主任をオ譲り申したらよかるふ、ろふすると随分面白いだろふ、一暗の夜に鳴かぬ鳥の聲さけば生れぬ前の母を戀ひしきだ、四月に田植も出來よふし、八月に稲も刈れるだろふ、そふなると附近の人もナルホドさすがは農林學校だと感心するでろふと。其後後藤氏來校せられ、高見氏と共に農場を巡視し果樹園に至り、蚜虫驅除の不行届を詰問せらる、高見氏曰く、蚜虫は既に驅除を了り一匹もをりませぬと、後藤氏曰くこれは何だと、高見氏曰く蚜虫の死骸です、一度死んだら二度とはどりつさはしませぬから御安心下さいと、後藤氏苦笑して亦他を言はざりき。苗代仕舞については

別に公文を以て理由を開陳し、郡農事試験場の移植期試験に属することを辨明し、二週間の後にあらざれば之を了すること能はざる旨を以てしたりしが、是より漸く直語の跡を絶ちぬ。中岡書記、半切の直語を綴り合せて、數十間に亘る一軸を作り、紀念直語集と名づけ之を保存せり、而して直語至る毎に中岡氏恭しく之を朗讀し、一同起立して之を拜聽するを常としたりき。

◎坊さんの御見舞はまだ早過ぎる

明治廿七八年戦役中、正覺寺住職井上隆信師、報國恤兵幻燈會を催し、各村を巡回せらる、余も亦之に加はり、農會を代表し戦時の農事奨励を説く、來會者常に満場、説明に時を移して深更に至る、或時稻田村の幻燈を了へ將に歸らんとす、風雨劇甚一行大に困しむ、出征兵士の苦難を思ひ、何くろと勇を鼓して進む、偶々提灯滅して呎尺を辨せず、余誤つて溝に陥りて倒る、隆信師に助けられ漸くに

して歸ることを得たり、時に午前三時過なりき、翌日隆信師余を見舞はる、余其親切を感謝して曰く「誠にありがたいが、坊さんの御見舞はまだ早過ぎる、まだぐ御一しよに御國の爲に盡さねばなりません」と、言了つて哄笑。

◎飯で鯛つる顔ぶりにこく

中岡泰治郎氏、常に一攫千金の利益を得るを欲し、専賣特許の考案に熱中し、遂に米洗器械を發明し、漸くにして特許を得しかもさよふ貧乏却つて損失するところとなる、而して尙種々工夫を凝らし、状袋の改良に熱中寢食を忘る、余即ち筆を採つて出鱈目を書し氏に寄せて曰く、

世の中にをかしまものは人心

めしで鯛つる顔ぶりにこく

と氏之を讀みて亦にこく然たも、氏我が意を了解せしや否や。

◎農學の必要は一世紀前の議論也

明治卅八年二月、郡會の開會を告ぐるや、郡會議員一同慰勞の宴を張り、余も亦招かれて其席に列なる、余茲に於て挨拶の詞を述べ、今回の郡會が非常なる同情を以て、滿場一致しかも原案を通過せられたるの厚意を謝し、之に附して根本的農事改良の策を述べて農學の必要に及ぶや、土橋氏起つて曰く、農學の必要は一世紀前の議論也、今更君が喋々の辨を俟たざるなりと、余笑つて曰く、誠に然り、一世紀前の議論にして、これが實行は本世紀の大仕事也、本郡農民の状態が、未だ一世紀前の議論を繰返さざるを得ざるは、余が甚だ遺憾とする所也と、酒三行共に酌んで情を温む、而かも是より土橋氏の同情愈加はりしを覺ゆ。

◎これは恐ろしいやイヤサるしやといふ國

關助教諭、時局幻燈會に於て、露國の地圖を示して曰く、是は、

ろしいやイヤサるしやといふ國と、其語恰も芝居のセリフに似て頗る奇、聴くもの覺ゆす失笑す、關氏曰く、笑ひどころか一生懸命だ、我國よりも國は大きい兵士は多い、軍艦も多い人間も大きくて目がひかつてゐる、丁度露の上ふな恐ろしい露國を相手にするのだ、笑ひどころの騒ぎぢやないぞ、しかも眞面目に持つところ、一層滑稽なりき。

◎借地に於ける二百三

戦時紀念相樂園創設の議熱し、土地の借入に従事するや、地主小作四十有餘、紛議錯綜容易に纏まらず、地上物の賠償要求額二千圓に上る片を亘つて決せず、而して開園の期迫る、憤慨に堪ゆず、茲に於て書を山本幹事に致して曰く、非常の元氣と非常の決心とを以て突撃を試みされば能はず、費意如何と、全氏答へて曰く、勇猛果敢共に旅順の陥落を期すべしと、余即ち山本幹事、中岡書記と共に毎

夜深更に至るまで談判を続け、二週間にして畧成る、中途山本氏感胃の爲め倒れんとせしも、始めの約に背かず、病を冒し宿直室に伏しながら其謀議に預かる、中岡氏も亦縦横腕を揮ひ、最後に最も頑固なるもの二人を残せしのみ、恰々旅順攻撃歩を進めて、二百三高地の奪取せられし當時にして、此二名も遂に屈伏の止む能はざるに至れり、又奇といふべし、而して賠償金僅かに五百圓余即ち出鱈目をついで、二氏に贈つて曰く、

借地に於ける二百三 剛勇無双の突撃は
追々効果あらはれて 残餘の敵艦畑上も
殆んど半ば沈没し 立往生の姿なり
残るは剛敵宇三郎 これも道理の機關砲
人並づくしの速射砲 ついで打出す彈丸に
孤城落日意氣消沈 旅順の月と踏共に

はかなき最後を遂ぐるらん ぬないさましやこのいくさ
あなすさまじやこの最後 帝國萬歳萬々歳
借地軍の大勝利

○僕の宅まで総攻撃をされては困る

相樂園借地問題の決するや、年末既に迫る、而してまた賠償金を支拂ふの運びに至たらざる也。小作連合してこれが支拂の日を迫る、期來りて支拂ふこと能はざる也、余中岡氏と共にその中間にたち、言を左右に托すれども少しもさよめふし、殆んど處置に苦しむ、而かも迫ること益々急、遂にやけを起して勝手にせよと叫ぶや、數十人一團となり、どきをつくりて直に觀音寺なる岡本氏の自宅に迫る、岡本氏吃驚して曰く、旅順ならぬ僕の宅まで総攻撃をされては甚だ困る、時節柄内輪喧嘩はやめよおぢやないかと、百方慰諭しほんまの期日を確定し、支拂を了し事始めて解く。

◎これが浮塵子の卵ですか何と大きなものですネー

本郡一般未だ害虫の知識に乏しく、常に稱して害虫が湧くといへり、殊に浮塵子に於て然りきす、其の根本的感念を打破せんと欲し、浮塵子の卵塊を携へ、之を顯微鏡にて擴大し、一般の縦覧に供せしむ、見るもの皆曰く、ハ、アこれが浮塵子の卵ですか、何と大きなものですネーと、余説て曰く、大きい筈だ、六十倍の顯微鏡で擴大してあるのだと。其後相樂小學校長多氣善之助氏、同校生徒を引率して來り、説明を乞ふ、依て前日の浮塵子卵塊を示し、顯微鏡下に置はしむ、多氣氏覺せず聲を放つて曰く、ハ、ア是が浮塵子の卵ですか、何と大きなものですネーと、余その肩を打つて曰く、君にしてこの言を爲すかと言ひ了つて哄笑。

◎フロクコートに高帽位の百姓が出来なくしてはだめよ

後藤部長、築庭術に長ず、本校庭園の改築に當り、自ら鋏を採つて人夫を督し、指揮頗る勉む、身にフロクコートを着し高帽を蒙り、半白の老翁鍬を振り上げる所、さながら一幅の、ボンチ畫の如し、人あり來つて其に戯れて曰く、戦後の經營帝國の前途も、此有様を見ては先づ大安神ですネーと、氏應じて曰く、今度の戦争で日本も文明國の首班に列し、國の位置も高まつたから、フロクコートに高帽位のお百姓が出来なくてはだめよ、併しこの老翁は餘り日當が高すぎるので一寸備ひ手のないには閉口ださ、うの人苦笑して去る。

◎相樂郡のカチーギーになり玉

郡會議員飯田三次氏、民力休養の下に、常に農林學校經費の節減を唱ふ、余其何の故たるを知らず、一日同氏を訪ひて曰く、農林學校も折角設立になつたが、ドーモ發育が鈍い、其筈である、丁度繼子に飯を食はささいとめておるようなものだ、此調子では到底ためた

殺すなら早く殺す方がよかったです、僕の苦境を察してくれ玉へ、僅か千圓や貳千圓の金が都で出せぬとは、よくよく貧乏神がとりついたものだ、千圓や貳千圓は君一人でも年々出せるならう、相樂郡のカチーギーはなり玉へど、余此禁言を以て、却つて其意を密せんことを恐れしも、氏大に悟る所やありけん、是ヨリ深く同情を寄せられ殊に本年の郡會には自ら校地買収の建議案を提出し、これが通過を見るに至りしは、深く感謝する所なり。

○モシ〜帽子を御忘れでは有りませぬの
西井助救諭、余と共に生徒を引率し、播磨地方を旅行し神崎縣に至りて下車し、帽子を瀛車中に忘る、偶々肥後仁土の如き英國人あり、來りて余に語る、其態度大小相對して頗る奇、一行之に氣を奪はれ、亦餘念なし、既にして瀛車進行を始むるに及び、西井氏迎ひて帽子を忘れたるを思ひ出し、覺へザッ、〜と呼ぶ、其聲甚だ異、人其

何たるぞ知らず、既にして伊丹驛に下車し、國藝試驗場并に養蜂園等を參觀し、將に歸らんとす、何れも西井氏乃帽子を蒙らざるを見て曰く、モシ〜帽子を忘れでは有りませぬかと、西井氏常に其答に窮す、曰くイヤ忘れしました、ついぶちようほうして瀛車の中に忘れしました。

○モウ夜が明けたか

中西郡視學、生徒募集につき非常に同情を寄せられ、余と共に東奔西走、奮闘的激戦を繰くること拾數日、激戦又激戦、しかも苦戦多くして頗る疲る、中和東村に至り別所の某家について勸誘周到、一名を得れば三名有望、中西氏口を閉づれば余之に代り余口を閉づれば中西氏又始む、夜酣にして四方寂莫、中西氏尚諄々瀕りに説いて息まず、余傾聴久しく疲勞の爲め頻りに眼を催し堪ゆること能はず遂に人事不省となる中西氏説き了りて余呼ぶ、余驚き醒めて曰く、

モッ夜か明けたかど、中西氏覺へず失笑、相携へて旅館に歸へれば、時已に午前一時を經過したりき。

○あの兵隊さんは妙だ毎晩かばる

河野教諭、戦後經營農談幻燈會に於て、旅順攻撃戦に於ける林伍長偵察戦の畫板を説明すること頗る周到、而して昨は軍曹となり今は上等兵となり明は伍長となる、同行の生徒之を評して曰く、あの兵隊さんは妙だ毎晩かばる、こんだは何に變はるだろふかと、河野氏應じて曰く、口は調法なるもので余の説明は如何に變るとも、畫に映じたる彼が服装は常に依然として變はらざる也と、傍に人あり笑つて曰く、そんなら服装を見て話したもふたれごふですかと、河野氏ナルホドこんだは間違へぬと、是より伍長を間違へざりき。

○パ、……パルラダ

森澤書記、時局幻燈會に於て二月八日旅順沖の襲撃を説明し撃沈せ

られたる敵艦バルラダの名を忘れ、パ、と取叫けんと、しかも後つゝかざるなり、劇かに思ひ出して、急にバルラダと叫ぶや、笑聲大に起る森澤氏、曰く諸君笑ひごころか萬歳を唱へ玉へ。

○是余が創意の新文字也

郡内小学校長招待會に於て、各校長本校職員と共に胸襟を開き、懇談時を移す酒宴半ばにして笑聲交々起る、吉岡加茂校長鈴木教諭と校訓のことを論じて、ろの消極的なること禮の字の誤れることを注意するや、鈴木氏しかも屈せずして曰く、校訓は必竟精神の表彰にして形式に過ぎざる也、文章の如何は論せざる所、實行が第一也と、吉岡氏も亦肯んせず、名實共に備はるべきを論じ議論の花咲いて頗る快、余傍にあり仲裁して曰く、農民には農民の禮あり、示邊に農の字是れ余が創意の新文字也と、二人笑つて議論遂に止む、盃をさして曰く、君はぬらいマァ一杯のみ玉へと

◎意多軒昂已に滿韓を呑むの慨あり

郡會副議長松原吉太郎氏、利源調査として滿韓視察を了へて歸るや、本校の招に應じて視察談を試む、抱負勇壯頗る大なり曰く自分等と一度海を越えて彼地に渡れば、意氣軒昂已に滿韓を呑むの慨あり、だと、吾人も亦此の話に吞まれて呆然たり、人あり戯て曰く、君に滿韓を吞まれては大へんだ、切角の苦勞が水の泡になると、松原氏覺せず失笑す。

◎モーションあなたは伏見の御役人さまですか

余中西氏と共に生徒募集として稻田村に出張し某家を訪ふ、家人あわて、上を下へ大混雜、余等々の何の故たるを知らず、已にして老嫗出迎へて敬禮甚だ厚く、モーションあなたは伏見の御役人さまですか、と余等々の奇妙なる問ひに怪しみしが、イヤあなたの内の子息さん、の事で御相談にまいりましたと、家人を、に於て安心せしもの、如

く、ろの混雜始めて息む、蓋し余等洋服を着し、髭ホウリくたりしを以て、伏見の執達吏と見間違へられしなりき。

◎國の爲め散りにし御玉

郡會議長中田菊松氏、利源調査として滿韓の地を視察せらるゝや、旅順要塞に至り砲彈の斷片を拾ひ、はるく持ち歸りて我校に寄せらる、厚意謝するに餘りあり、水久之を保存し、日露戦争紀念祭にむかしをしのぶ形見に供せんとす、依て出鱈目を詠じて氏に謝して曰く。

ながくにたのもしきかなくにの爲め
ちりにししみ靈まもりつさねば

◎何とむづもしものですキー

高見助教諭、果樹植付に當り、偶々肥桶をかつぎつゝ附近を通行せる農夫呼び止め、これが植付につき説明すること頗る周到、通行の

農夫足を止むるもの數十名に達す、恰も辻喧嘩に人の集り群るが如し、ろの内一人覺悟せず聲を放つて曰く、何とむつかしいものですや、いと、又一人は曰くナルホド百姓をしても理屈を知らねばためじや、と、皆その説明に感心せるもの、如し、高見氏すかさずして曰く、これちやから農学校の必要があるのげやと、是より附近の農民來りて説明を請ふもの日に益々多きを加ふるに至れり。

◎先づ罷の生へた害虫を驅除するも第一だ

去る三十七年の夏なりき、余害虫驅除監督として稻田村に出張巡視するや、後方に人あり私語して曰く、浮塵子の驅除よりも先づ罷の生へた害虫を驅除するが第一だ、ろしたらこんなしちめんごふなよけいな仕事をして手間をつぶさなくてはすむと、余顧みてろの傍に至る、ろの人さまりわるるをな顔して、しきりに石油罐を取出して注油驅除の準備を為すもの、如し、余即ち説ひて曰く、自分どもは

君等のお味方だ、自分等がやかましくいはなかつたら、浮塵子はなんど結構な慈悲深い親方さまだ、食ひはふたい飲みはふたい寝はふたい子孫繁昌と踊つてよろこぶのであるふがろの代り君等が收穫する時になると、顔をしかめてドゥモ今年は順氣の工合か思ふたより米が少い、コリヤ小作米をまけて貰はねばならぬぞとんだ迷惑が地主にまでかゝるのであるふ、これ見給へとかふもり傘で稻株をふるへば浮塵子の幼虫パラ／＼落つるもの一株概ね七八匹これが最一ぺん孵化すると二十倍になる、三割や四割の米は先づこの虫の初穂に備へねばならぬのだと説き聽かすや、その人ハ、アこれが八釜しくいははる浮塵子ですか、この虫なら併し毎年います今年に始まつた譯ではありませぬと、余笑つて曰くだから余等は毎年浮塵子の米召し上りになつた残りものを戴いているのだ、少し目があかぬと困るドゥモ本氣で驅除するか、たまじないの石油ふりまき主義では承知

せぬと、ろの人恐れ入つてこれより本氣にて驅除につとめけり

○あの小使の足をへし折つてやれ

余短冊苗代検査として木津町に出張し、飯田助役と共に小使を召連れ、巾の廣さものは小使をして悉く之を踏み切らしむ。傍に人あり「ナンナ顔をしてながめつゝありしが余等が遠く去るやその人獨言して曰く、あの小使の足をへし折つてやれと、かくすること數十ヶ所にして亦一人あり曰く、今に見よあの小使の足は立たぬよふになると小使恐る、こと甚だし、余等元氣をつけて曰く、何大丈夫だ引受けてやるからしつかりやれと、既にして數人群り來りて、しきりに苦情を訴へ農林學校の攻撃始まる、余即ち短冊苗代の効用を説き、農會と農林學校との關係を明かにし、之を内科と外科とに例へて農會の外科療治の必要を説き將來を誠しむ、これより短冊苗代の實行漸く普及するに至れり。

○頭の火事ぢや

幸脇助教諭、戦後經營農談幻燈會の技師として、アセチリン瓦斯發生装置を爲し、しかも瓦斯發生せざる也、ねちを取り引出しを引出し、ろの原因を究めんと欲し、生徒をして獨火を照らさしむるや、爆然點火し火焰幸脇氏を掩ひ眉毛及び頭髮を焼く、余隣室にあり驚き何じやと叫ぶや、幸脇氏「イヤ、頭の火事ぢや」と、幸にさしたる火傷なかりしは先づ幸ひなりき。

○梯子を持つて來て取ります

余短冊苗代検査として相樂村に出張し、喜多助役と共に苗代田を巡視し、しかも村の傍に大なる巾廣苗代を發見し、小使をして之を踏み切らしめんとするや作人走り來りて、コレ、六事な苗代を踏みくちやにするのは誰ぢや無茶やナアと叫ぶや余、之を責めその不心得を論して曰く、こんな巾の廣ひ苗代では草引も虫採りもごふして出來るものかと、言未だ了らざるに「へ、長い梯子を持つて來て探

「ま、ま」と余笑つて曰く、彌次喜多の二代目ちやなど、懇々諭すや曰く「へい踏み切るなら私の前代ですから私がやります」と遂に屈伏して自ら踏み切りたるは一層滑稽なりき。

◎學校創立以來の大愉快ちや

本校創立五週年紀念式餘興運動會に於て來賓競走の帶來るや、白半の老翁後藤部長、松田郡會議員等、しかも若手の群に加はりて提灯競走と出かけ、却つて壯者をしのぎ頗る喝采、殊に松田氏は一等賞(優頭)を得てにこく然たるどころ、恰も名工の畫ける如びすの如し満場覺ゆる拍手勸進す、會終つて慰勞の宴を張るや、後藤氏さもうれしうふに満面笑み々満へ、ドゥモ今日は學校創立以來の、愉快ちやと蓋し創立以來意の如くならず、常に郡會の賞の道具に使はれたるの感ありしを以てなり、吾人群を揃へて曰く、モウ大丈夫ですと。

根なし師終

明治三十九年八月三十日印刷

全 年九月十日發行

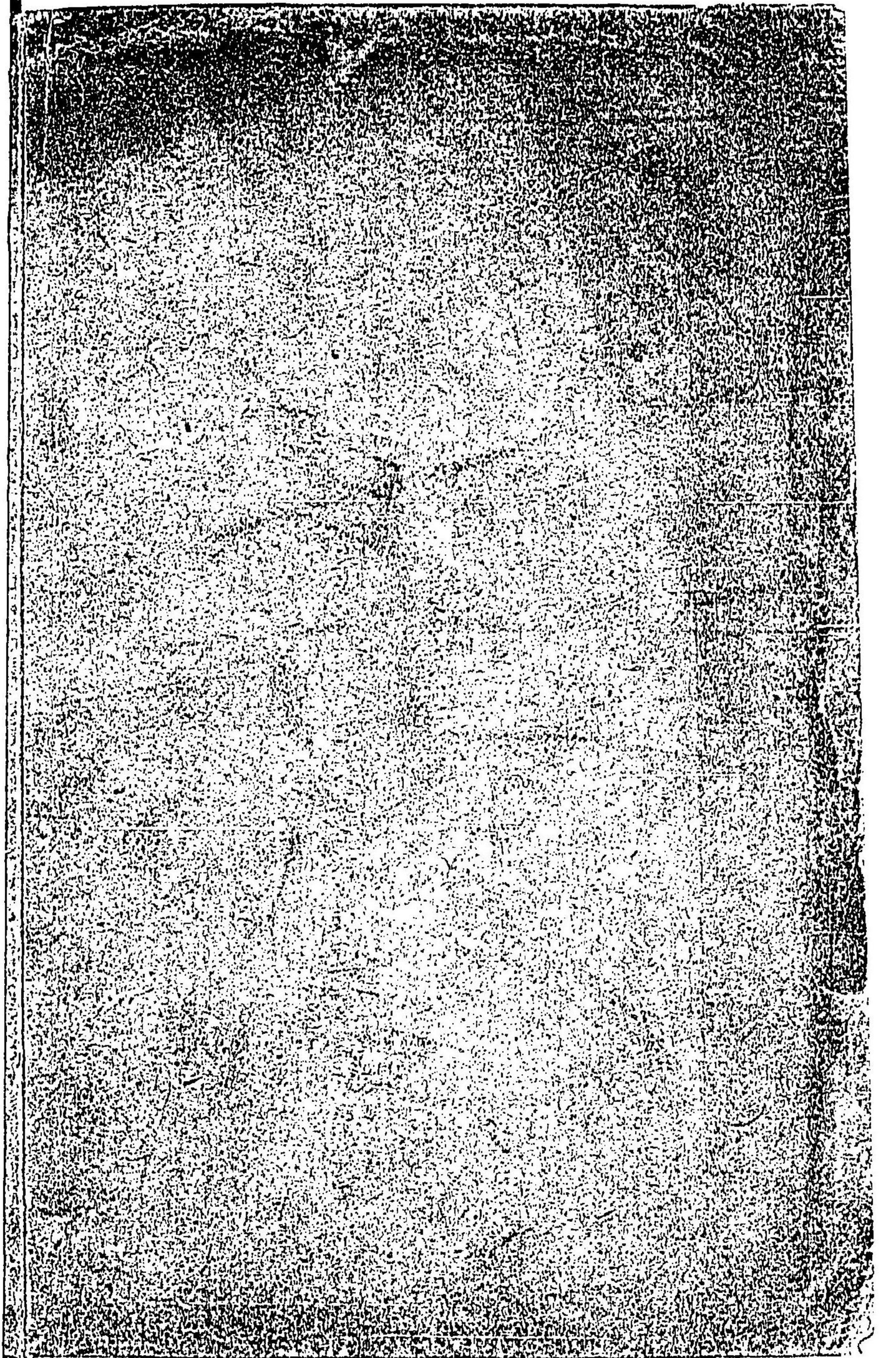
山城國相樂郡木津町宇燈籠寺
八十三番地寄留

發行人 西谷 忠雄

非賣品

山城國相樂郡木津町宇木津町
三百七十三番戸

印刷所 杉浦活版所



○農學の必要は一世紀前の議論也

明治卅八年二月、郡會の閉會を告ぐるや、郡會議員一同慰勞の宴を張り、余も亦招かれて其席に列なる、余茲に於て挨拶の詞を述べ、今回の郡會が非常なる同情を以て、滿場一致しかも原案を通過せられたるの厚意を謝し、之に附して根本的農事改良の策を述べて農學の必要に及ぶや、土橋氏起つて曰く、農學の必要は一世紀前の議論也、今更君が喋々の辨を俟たざるなりと、余笑つて曰く、誠に然り、一世紀前の議論にして、これが實行は本世紀の大仕事也、本郡農民の狀態が、未だ一世紀前の議論を繰返さざるを得ざるは、余が甚だ遺憾とする所也と、酒三行共に酌んで情を温む、而かも是より土橋氏の同情愈加はりしを覺ゆ。

○これは恐ろしやイヤサるしやといふ國

關助教諭、時局幻燈會に於て、露國の地圖を示して曰く、是は

るしやイヤサるしやといふ國と、其語恰も芝居のセリフに似て頗る奇、聽くもの覺ゆる失笑す、關氏曰く、笑ひどころか一生懸命だ、我國よりも國は大きい兵士は多い、軍艦も多い人間も大きくて目がひかつてゐる、丁度露の上ふな恐ろしい露國を相手にするのだ、笑ひどころの懸さぢやないかと、しかも眞面目に構へしどころ、一層滑稽なりき。

○借地に於ける二百三

戦時紀念相樂園創設の議熟し、土地の借入に従事するや、地主小作四十有餘、紛議錯綜容易に纏まらず、地上物の賠償要求額二千圓に上る片を亘つて決せず、而して開園の期迫る、憤慨に堪はず、茲に於て書を山本幹事に致して曰く、非常の元氣と非常の決心とを以て突撃を試みされば能はず、貴意如何と、全氏答へて曰く、勇猛果敢共に旅順の陥落を期すべしと、余即ち山本幹事、中岡書記と共に毎

